# 短歌募集

△課題　隨意
△〆切　毎月末日
△發表　本誌上
△賞品　三光に粗景を呈す
△選評　眞宮起雲
△投稿　用紙は隨意にて左記の所に送らるゝ方は往復葉書又は切手封入にて申越されたし
伊勢國白子局區内みどり短歌會

## 春風春水

眞宮起雲選

○　平岩繁治

神代より降りにし不二の雪ながら明けてぞまさる國のみひかり

○　中島文子

年祝ぎにとなりの少女まづ入りぬ錦繪あせし羽子をやりしか

○　吉野絹子

新どしの歌おもひ居るわが髪をなぶるかのごとはるかぜのふく

新らしく琴の緒かへて奏で見る樓のおぼしまはつ日はえあり

○　飯塚曉霞

今朝汲みし若水清くあたらしくやどるわが影いとふりにける

笑み若うとしは九つあけのはるあまりやさしきほぎの歌かな

○　長谷部和子

うち笑みて我とる鍬よ君が筆よいづれまことの笑まひなるらむ

○　田中三舟

希望ある年のひかりのきらめきや河づらかけてはつ日かゝやく

○　久保艷子

少女子が紙鶴おりて白梅につるすたもとをはるかぜふく

○　林靜子

江の南あさもや白うひと村ははなのあめつち匂ひにしもる

○　伊藤天郎

我は笛きみは琴とるはるの夜を梅が香ふくむつきおぼろなり

○　高木紅玉

せゝらぎて流れつきせぬ五十鈴川君がみいつをこと祝ぐに似て

雪のうちを長蛇走れるすがたしてはつ日かゝやくありなれの水

○　田邊孝

窓によりて君待ちおればはら〳〵と薔薇の花ちる薄月夜かな

えせ戀の狂ひのいぶきつくな君しろき花ちり香はこぼたれん

○　鈴村仙子

破琴(やれごと)に師のみうた乞ふはるの宵つきもおぼろや紅梅のまど

えせ歌とさけしみますな昨夜(よべ)みたる夢のまゝをば泣きて綴りし

○　吉田春蘭

花あまた匂ひこめたる世の春を旅にさまよふわれやせにけり

あやうくも探りよりたる暗の戸に夜風つめたき世なり春なり

○　起雲

おぼろ夜をひとり逍遙ふうた人が
微吟にゆるゝ梅のにほひや
いかめしき黄金の鞍のきらめきや
のぼる旭に軍馬はえたり

立かへり又きさらぎの空さえて
天きる雪に霞む山の端

（爲兼卿）

いさら水かつ〳〵花のちりうきて
梅が香爽し小田の中道

（井上文雄）



# フレーベル會俳句端書集

一、課題　當季雜吟一人十句以下
一、締切　毎月二十五日限り
一、披露　翌々月本紙上
一、賞品　三光には繪葉書を呈す
一、撰者　當分本會の撰とす
一、投稿　本誌讀者は何人にても投吟する事を得用紙は繪葉書に限り（眞筆刷物隨意）住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村
フレーベル會俳句掛
鹽野奇零宛

## 第十九回俳句端書集

橋の灯も師走めきたる往來かな　甲州　泉岳
霜晴や鷄の蹴ちらす麥畑　同
蓮掘た跡や時雨るゝ鷺一羽　大坂　きよ子
鳥の啼く崖や氷の解ける音　信州　耕村
福壽草風にもあてぬ置き所　尾張　素岳
火の消えて夢のさめたる巨燵かな　同
安房　稻年

普請した藏の南や冬牡丹　同
この雪に神詣する女かな　越後　花香
梅を待つ心もどかし冬ごもり　同
尼寺を日毎に訪ふや三十三才　同
川涸れて砂の白さや冬の月　紀伊　樂山
春は花の咲くとも見へず冬木立　富山　春水
寒月や雲なき空を風の吹く　遠江　きく女
一座皆決死の士なり鶴のなべ　同
霜白しけものゝ跡を山づたへ　長野　曉霞
雪やみて庭の小松や月のかげ　同
篝焚く火の番小屋や冬の月　同
鯨つき乘出す舟の矢の如く　大分　春月
土佐沖や鯨取卷く五十艘　同
辻堂に非人病み居る寒さかな　同
冬ざれの朝空千羽鴉かな　同
外風呂に濡るゝ夜雨や厂の聲　仙台　一瓢
藪尻に捨灰白し水仙花　同
鳥かげのさす窓下や水仙花　同
山門や朝まだきから大根引　同
七種や手まで叩きて笑ふ下女　神戸　學洋
一筋に水の流れて冬の月　同
幾度か寢顔をのぞく夜寒かな　同
福引や風呂敷背負て戻りたる　同
元日や日出たきまゝに暮れて行く　同
兎狩りて麓に來れば小雪かな　上野　柳蛙
餅搗てもう春來たと笑ひけり　同
木枯や夜明に高き月一つ　相摸　幾林
一筆に過去と未來や年始狀　武藏　無月
乞食の椀かゝへ行く枯野かな　埼玉　一甫
市引けて人聲もなし冬の月　栃木　さだ子
初荷出す聲の賑はし港口　同
笹啼や小さき庵日一ばい　同
茶椀持つ子一人殖えて雜煮かな　埼玉　白醉樓
一家皆舟に拜して初日出　同

## 三光

その上の初日尊し五十鈴川　一甫
初空や千代田の小松色榮へて　白醉樓
宿直に遠き火事見る寒さかな　春月

## 追加

初空や五十鈴の川のすがくし　無一庵奇零
凱旋に往來の人や松の内
はね炭やそり身になりし下女の顏

河上は柳か梅か百ちとり　（其角）